

17) カラタチ=枳殻

カラタチは1属1種のミカン科の落葉低木で、原産地は中国である。『出雲国風土記』や『万葉集』『枕草子』にもその名が見えており、晩春から初夏にかけて、芳香のある白い5弁花を咲かせる。果実は径5cmと橘よりも少し大きい。カラタチの由来は『唐橘』で、これが詰まったものである。鋭い刺を有するために昔から生け垣などによく植えられてきたが、ミカンや柚子などを接ぎ木するときの台木にも用いられている。漢方では未熟果を乾燥させたものを『枳実』(キジツ)といい、完熟寸前のものを輪切りにして乾かしたものを『枳殻』(キコク)という。『本草綱目』によれば、枳の果実で皮が厚く小さいものを枳実といい、熟して皮が薄く大きなものを枳殻という。ともに薬用とし、俗に『臭橘』(シュウキツ)と呼ぶものは薬用にはならないと記されている。臭橘はまた『枸橘』(クキツ)ともいい、日本の垣根によく植えられていた。これを枳実と偽って売られたことも多かったという。枳殻は健胃薬や浴湯料として風呂などに入れて用いられていた。枳殻の熟果はマーマレードなどにも加工されるが、いずれも強い芳香があって、今流行りの癒しの植物でもある。しかし『枕草子』の146段の中では「名よりも見るはをそろし」として枳殻をあげている。荊とともに記述されているので、鋭い刺があったためであろう。『万葉集』には一首のみの記載が見られるが、思わず嘔き出したくなるような代物である。

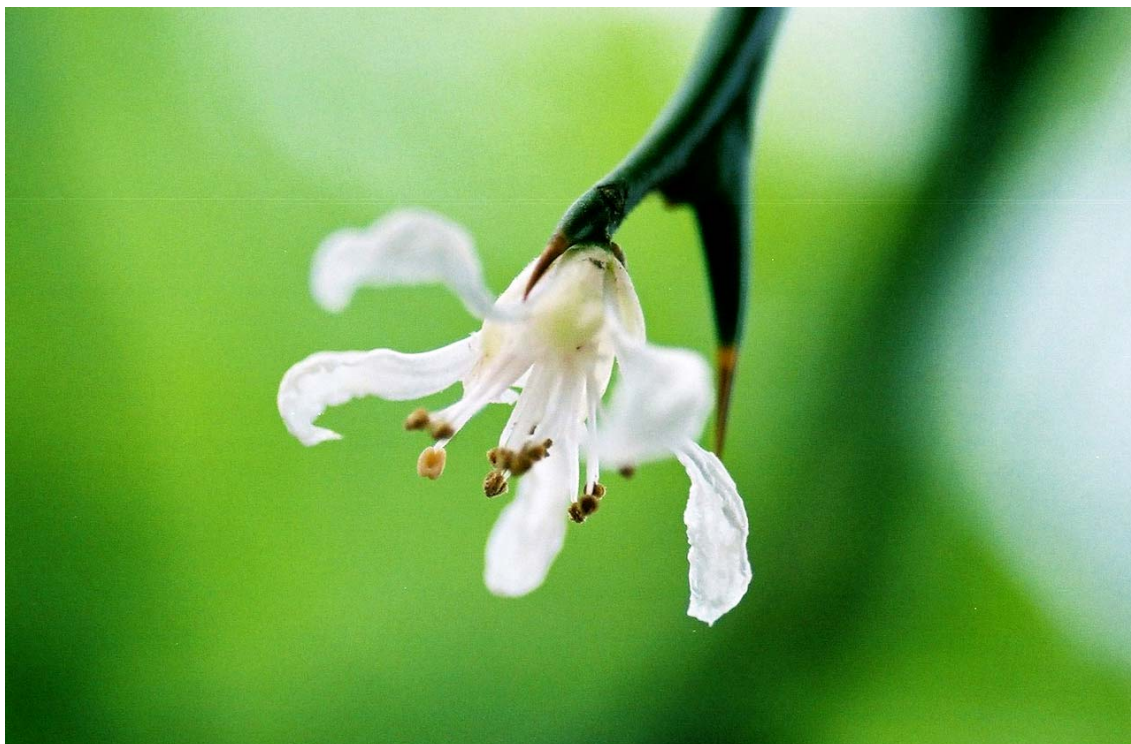
枳(かた)の棘原(か)う)苅りそけ倉立てむ 屎(ク)とほくまれ櫛造るとじ
この歌の意味するところは「刺のある枳殻を刈って、倉を立てよう。屎は遠くの方でしなさい。櫛造るご婦人よ」という意味でよくぞこんな歌を残したものである。屎は尿に対応する言葉で、尻を意味する尸(シ)に米と水という原料を記したもので、いたく論理的な文字はあるが、この尸タレのついた文字にろくなものはない。屍、屁、屑、…。お口直しに北原白秋作詞、山田耕筰作曲の有名な歌を記しておこう。

からたちの花が咲いたよ 白い白い花だよ

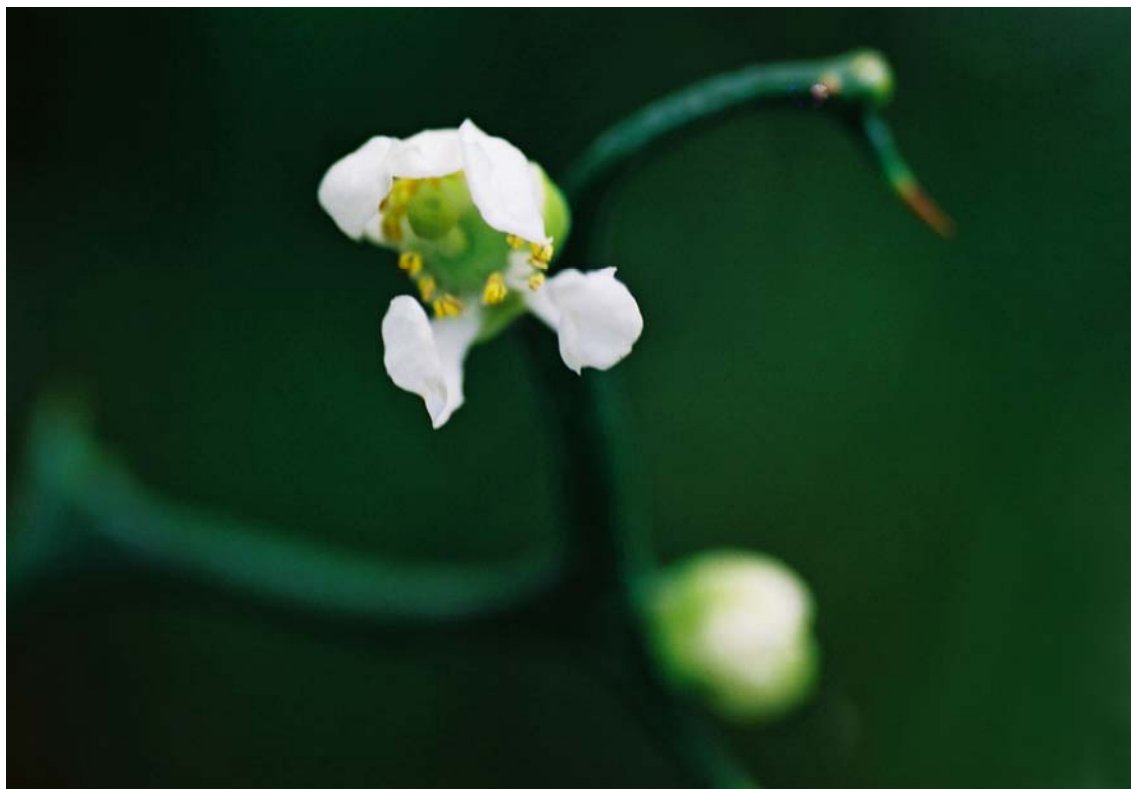
からたちの刺はいたいよ 青い青い刺だよ

明治から大正、昭和の詩人の中で白秋ほど花の名前を織り込んで、作詩をした人は他にいない。それも華やかなものよりは、路傍でひっそりと咲くスマレやエンジュ、キリ、サルスベリやアカシア、そしてジンチョウゲやケシ、アザミなど目に入る全ての花が、白秋の詩においては生き生きと語られており、そこから白秋の自然への愛着がしみじみと伝わってくる。そして創作童話や創作民謡などにも新境地を開いていった白秋の作品には、閑寂境の境地のようなものが伝わってくる。

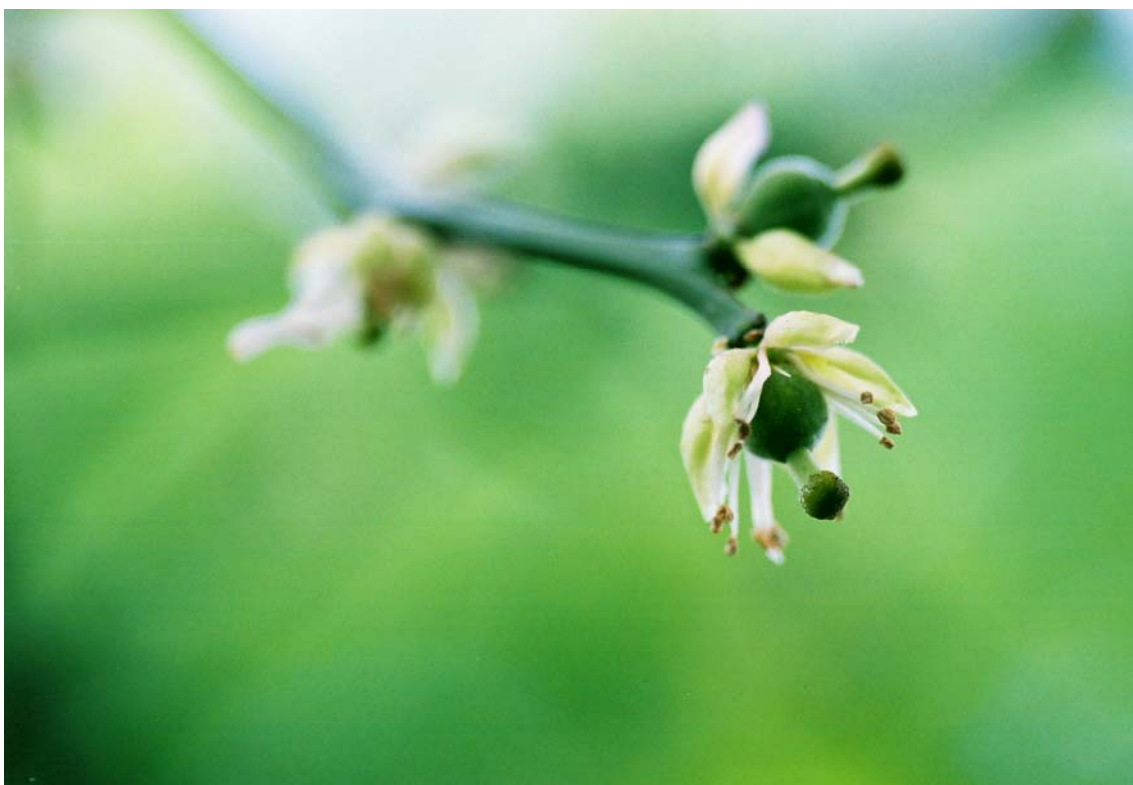
カラタチは実生でよく増える。このため柑橘類はカラタチを台木にして接ぎ木をして増やすものが多い。陽当たりと水捌け以外のことは何も気にすることなくよく育ってくれる。ただし苗木は滅多に売られていないので、自分で実生するか、深谷市などのミカンを接ぎ木している農家に行き分けてもらうのが一番いい。



北原白秋の『枳殻の花』は、ちょっと寂しげな花。作曲者の山田耕筰は幼くして養子に出された。働きながら夜学に通い、辛い時には枳殻の垣根の傍らで泣いたという。耕筰と白秋は深い親交があり、白秋は耕筰のそんな心情を察してこの詩を書いたのだという(埼玉県所沢市)。



そんな人の心の悲しみを知ってか、楚々と咲くカラタチの花(埼玉県所沢市)。



カラタチの花、雌シベの奥にはすでに果実が少し膨らんでいる。これが秋になると金の玉になるというわけである(さいたま市浦和区)。



カラタチの果実は、正に♪まろいまろい金のたま♪である(さいたま市浦和区)。

[目次に戻る](#)